

[2017/2018] 九州大学附属図書館研究開発室年報表 紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1935822>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2017/2018, 2018-07. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

平成 29 年度における研究開発

1 学習・教育支援に関する調査研究

室員	富浦 洋一 (附属図書館副館長, システム情報科学研究院教授)
	石田 栄美 (附属図書館研究開発室准教授)
	山田 政寛 (基幹教育院准教授)
担当窓口	斎藤 未夏 (利用支援課長)
	田中由紀子 (伊都地区図書課長)
	渡邊由紀子 (教育主幹)

<研究開発の概要>

九州大学における学習・教育活動と連携した新たな教育支援のあり方について調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 「教育の国際化に対応した学修支援環境の構築」の取り組み (富浦, 石田, 山田, 職員)

教育改革の推進を目的とした学内プログラム「教育の質向上支援プログラム(Enhanced Education Program : EEP)」に、附属図書館の3ヵ年プロジェクト「教育の国際化に対応した学修支援環境の構築 -アクティブ・ラーナー育成を推進する次世代の大学図書館をめざして-」が採択されて3年目を迎えた。附属図書館がこれまでに構築してきた学修・教育支援体制を継承し、グローバル化の観点から発展させるため、最終年度である平成29年度は、附属図書館、付設教材開発センター、統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻が一体となって、以下の事業を実施した。

1) 国際化拠点図書館の開館に向けた図書館学習サポーター事業の推進

図書館TA (以下, Cuter) は、具体的な学習支援活動として、①学習相談デスクでの案内・指導、②講習会等の講師および補助、③Web上の学習ガイドの作成、④学生交流イベントの企画・実施、を行った。このうち、Web上の学習ガイドについては、「私の卒論ができるまで」と題した初めての共通テーマを設け、ガイドを作成・公開した。また、「新中央図書館サービス計画2018」(附属図書館商議委員会H29.6.21承認) および「理系図書館サービス計画2018」(附属図書館商議委員会H29.12.15承認) を策定し、両計画において、Cuterによる学習支援を図書館サービスの一つとして明記した。

2) 教育の国際化を支えるコンテンツ整備体制の構築

国際化を目的として平成28年度までに選書した図書に関する利用状況の分析を行なうとともに、留学生が多く居住する伊都協奏館を対象に、国際交流エリア配架資料等に関するアンケート調査を行った。また、国際コースの教員および平成30年度開設の共創学部の教務担当教員にヒアリングを行い、当該部局の選書体制と図書館に対するニーズを把握した。加えて、電子ブックについては、契約数の多い分野の教員・院生にヒアリングを行ったり、トライアルを積極的に実施したり、Twitterでタイトルを紹介したりなどによって、電子ブックのニーズ把握と利用促進を進めた。

3) 教育の国際化に対応した図書館利用教育の拡充

図書館活用スキル習得のためのゲーム教材の新バージョンについて、プロトタイプを開発し、平成30年度の試行運用に向けて評価・改善を行った。また、留学生を対象とした英語による講習会については、平成28年度のアンケート結果をふまえて、文献検索および文献管理に関するモデル教材を作成した。加えて、新入留学生を対象とした英語と日本語による図書館ツアーを箱崎・伊都・大橋・筑紫の各地区で実施した。これまでの、中央図書館・伊都図書館に加えて、芸術工学図書館においても、図書館職員だけでなく、Cuterがツアーコンダクターを務めた。

4) 基幹教育支援の拡充

平成26年度から実施している「1年生向けレポートの書き方講座」「1年生向けプレゼン講座」に加え、基幹教育のニーズをもとに、実験レポートにまで対象を拡大した相談会を試行した。この試行結果、および、基幹教育院の教員からの助言をふまえて、平成29年度後期には、「1年生向け実験レポート講座」を開催し、Cuterが企画・講師を務めた。さらに、これまでの実績から、平成29年度高年次基幹教育科目の前期集中講義「レトリック基礎」「プレゼンテーション基礎」に、授業計画の段階から講義当日までCuterが協力した。特に「レトリック基礎」では、Cuterが教員と協働で講義を担当した。

5) 学習支援を推進する人材育成

学内外で開催されるシンポジウムや講座等に、本取組担当者及びCuterを派遣し、学習支援に対する意識及び技能の向上を図るとともに、先進的な事例を収集した。また、「図書館職員向け障害者支援に関する研修会」を中央図書館と各館をTV会議で結んで開催し、研修成果や関係会議の情報を共有した。加えて、文学部司書養成課程に直接関与する図書館職員を拡充し、学部教育への組織的な協力体制を強化した。さらに、ライブラリーサイエンス専攻の専門科目への授業協力に加え、H29年度後期から特別研究（合同ゼミ）にも図書館職員を参加させ、大学院教育に直接関与する人材を拡充するとともに専攻との連携を強化した。

本取組の総括的評価として、図書館情報学分野で著名であり、図書館長等の立場から学習支援組織の運営に関して豊富な経験を持つ学外有識者2名による外部評価を実施し、評価結果をウェブサイトで公開した。本外部評価において、Cuterとの協働による学習支援は最高評価Aを獲得し、EEPの取組全般でも「国内でも先導的なモデルの一つとして高く評価できる」、「継続して実施していく必要性は十分に認められる」とのコメントを得た。

2 教材開発および著作権処理に関する調査研究

室員	岡田 義広（附属図書館付設教材開発センター教授）
	吉田 素文（附属図書館研究開発室特別研究員）
協力教員	金子 晃介（サイバーセキュリティセンター准教授）
担当窓口	古賀 幸成（図書館企画課専門員）

＜研究開発の概要＞

インスタラクショナルデザインに基づいた教材、教育方法の研究開発と、教材作成にかかる著作権処理問題について調査研究を行う。

＜研究開発の内容＞

1. 部局と連携した教材開発

- ・基幹教育院、法学研究院、比較社会文化研究院と連携し、ディベート教育支援システムの機能見直しを行い、新しいディベート教育支援システムを開発し実際に講義で使用した。
- ・キャンパスライフ・健康支援センターと連携し「メンタルヘルスケア」教材の開発を、留学生センターと連携し「漢字学習用Web教材」をそれぞれ開発した。
- ・人文科学研究院との連携による、日本史学（宮中儀礼）、中国文学（鴻門之会）の電子教材及び医学研究院との連携による、放射線治療トレーニング用電子教材などの3DCG電子教材開発を継続実施した。高大連携の取り組みとして、平成30年2月1日に西南学院高校において中国文学（鴻門之会）の電子教材を用いた授業を実施した。また、日本史学の電子教材を元に、鴻臚館の歴史を学習する電子教材を開発した。これは、平成29年9月7日から10月22日に福岡市博物館にて開催された特別展示「発見100年記念特別展 よみがえれ！鴻臚館 一行き交う人々と唐物一」の一部として一般公開された。
- ・授業科目の英語化支援の一環として、基幹教育総合科目「サイバーセキュリティ基礎論」の残部について英語化を実施した。昨年度英語化を実施した基幹教育理系ディシプリン科目「情報科学」と共に、来年度の共創学部授業で使用される予定である。

2. MOOCの開講

平成26年度から教材開発センターが所有する独自のスタジオでMOOCコンテンツ制作に取り組んでおり、平成29年度は、丸山宗利准教授の「昆虫学入門 -多様性を探る」を3週分の講義コンテンツとして制作した。講座の内容から開講時期は夏季が適当と判断し来年度開講することとした。それに代わり、一昨年度開講した岡村耕二教授の「個人と組織のための最先端サイバーセキュリティ入門」を再開講した。開講期間中の受講登録者は560名で、このうち修了者は170名であった。修了率が30.4%と高値となったほか、コース評価では、「大変満足」と「やや満足」を合わせて81.2%とこれも高値であった。日本語と英語の字幕付コンテンツであり、字幕の効果については、98.6%が日本語を母語とする受講者において、字幕を利用すると回答した割合は全体の71.5%、英語字幕を利用すると回答した割合は全体の21.4%と字幕の有用性が示された。

3. 電子教材著作権処理に係る取り組み

・教員が作成した電子教材の授業利用やネット配信する際の著作権処理の考え方等を共有する目的で、電子教材著作権講習会(全学FD)を各キャンパスにおいて開催した。

・平成26年5月の設立時から参加している、大学学習資源コンソーシアム(CLR)において活動を継続している。CLRに設置している、活用ガイドラインワーキンググループ(主査：吉田室員)が作成し、平成28年4月に公開した「大学学習資源における著作物の活用と著作権」の英語版を、平成29年6月にCLRホームページより公開した。また、CLRと連携した取り組みとして、吉田室員を講師として「著作権セミナー」を開催した。

3 コンテンツの形成および保存に関する調査研究

室 員	川平 敏文 (人文科学研究院准教授)	
	和仁 かや (法学研究院准教授)	
	中里見 敬 (言語文化研究院教授)	
	永島 広紀 (韓国研究センター教授)	
	三輪 宗弘 (附属図書館付設記録資料館教授)	
	梶嶋 政司 (附属図書館付設記録資料館助教)	
	古賀 康士 (附属図書館付設記録資料館助教)	
	Wolfgang Michel (附属図書館研究開発室特別研究員)	
	職 員	梶原 瑠衣 (図書館企画課企画係)
		山根 泰志 (利用支援課サービス企画係)
西 真里恵 (資料整備室雑誌情報係)		
原賀可奈子 (eリソースサービス室eリソースマネジメント係)		
相部久美子 (医学図書館閲覧係)		
古賀 京子 (医学図書館参考調査係)		
吉丸 梓 (文系合同図書室資料管理係)		
宮嶋 舞美 (文系合同図書室資料サービス係)		
担当窓口		吉松 直美 (資料整備室長, 図書館専門員)
		井ノ上俊哉 (eリソースサービス室長, 図書館専門員)
	河上 章彦 (医学図書館専門員)	
	堀 優子 (利用支援課図書館専門員)	

< 研究開発の概要 >

九州大学が所蔵する貴重資料、コレクション等について、由来や内容、価値等の調査や、画像及び書誌データベース作成等についての調査研究を行うとともに、図書館における資料保存・管理体制等についての調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 雅俗文庫の公開

中野三敏名誉教授の旧蔵書である「雅俗文庫」は、平成21年度の購入、その後の寄贈、平成27年度の追加寄贈を経て、和装本資料8,300点以上、洋装本資料約4,400点とその他の資料群からなる、九州大学の一大コレクションとなっている。平成22年度から、川平敏文室員の指導のもと、人文科学研究院の研究員・大学院生とともに書誌情報の採取・データ入力を実施し、公開を続けている。

平成29年度は約3,400冊の和装本を登録した。うち今回は特に「法帖」と呼ばれる書の手本帖、約1,000点の登録を完了している。さらに洋装本約4,400点の登録も完了した。洋装本の受入にあっては、コレクションの関連調査として中野三敏名誉教授、個人蔵書群の書誌情報もリスト化し研究に備えた。受入れた洋装本は新中央図書館の1階壁面書架へ配架し、平成30年10月のグランドオープンとともに公開する予定である。

2. 旧植民地関係資料の整理

1919年（大正8年）に国内で三番目に設置された本学農学部においては、帝国大学期に樺太・朝鮮・台湾に附属演習林を持ち、アジア地域に近接した基幹大学として農学関連の資料収集を行ってきた。これらの資料群の中には旧植民地関係資料の希少価値が高い文献が含まれており、内容も経済、社会、気象、貿易、交通等と多岐に渡っている。

平成29年度は移転を直前に控え最終整理を行った。昨年度分類を確定した満州国関連資料約770冊をはじめ、1,000点以上の登録を行い利用・保管のための装備も完了した。平成26年度に設置した整理に係る専門委員会も、最終報告会を3月に開催し任務を完了、解散した。整理を終えた旧植民地関係資料は、平成30年度、伊都図書館（理系図書館）へ移転し、配架される予定である。

3. 濱文庫所蔵戯単・レコードのデータベース化

科研費基盤研究(B)「濱文庫所蔵戯単・レコードのデータベース化と保存法の改善」（平成28～32年度）により、濱文庫に所蔵される戯単およびレコードのデータベース作成、解説執筆を進めた。平成29年6月17日に科研費による研究集会「演劇アーカイブの最前線：イギリスと中国」を伊都キャンパスで開催した。

4. 濱文庫で冰心の『春水』手稿を発見

濱文庫に所蔵される詩集『春水』が、現代中国を代表する女性作家・冰心（1900～1999）自筆の手稿本であることが判明し、この手稿が周作人から濱一衛に贈られた経緯も明らかになった。6月に中国の学術誌で論文発表するにあわせて、広報室主催の記者発表会を附属図書館で行い、中国駐福岡総領事館より何振良総領事が『春水』手稿閲覧のために来館された。その後、周家・濱家双方の尽力により書簡15通が発見され、さらに周作人から濱一衛に贈られた書4点（周作人、銭玄同各1点、兪平伯2点）も見つかり、九州大学附属図書館に寄贈された。こうした研究の進展を承けて、平成30年2月6日に新中央図書館で「『春水』手稿と日中の文学交流：周作人、冰心、濱一衛」国際シンポジウムを、言語文化研究院主催、附属図書館共催で開催した。またシンポジウム論文集（全3冊、554頁、28名執筆）を刊行し、九州大学学術情報リポジトリより公開した。『春水』手稿の発見およびシンポジウムは新聞やテレビ等で報道され、中国をはじめとする海外を含めて大きな社会的反響を呼んだ。主なメディアとして、中国の人民日報、人民中国、中国社会科学報、台湾の中央通訊社、国内では朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、西日本新聞、日本経済新聞、NHK、大学ジャーナルオンライン、文教速報などが報道した。

5. さよなら箱崎キャンパス企画展示の開催と金田文庫の紹介・整備

九州帝国大学法文学部で法制史講座を担当し、九州文化史研究所発足時の所員や第13代附属図書館長も務めた故金田平一郎教授(1900-1949)の旧蔵書のうち本学法学部が購入した分が、7月に文庫化された。本文庫は、九州の地域的特性に着目しつつ法文学部の学際性を最大限生かした同教授の研究活動の中でかたちづくられ、大学の蔵書形成上も大きな影響を与えた、まさに箱崎で培われた知的営為の一つの側面を象徴するものでもある。従って「さよなら箱崎キャンパス」企画の一環としてこの金田文庫と附属図書館の歴史とに焦点を当て、平成30年3月1日～26日まで中央図書館において展示「金田平一郎と九州大学附属図書館」を企画・開催した（附属図書館・法学研究院主催）。展示パネルと目録は、九州大学学術情報リポジトリより公

開している。

URL: <http://hdl.handle.net/2324/1913973>

なおこの過程でご遺族から、大学や図書館の歴史上も貴重な資料を多数ご寄贈いただき、現在併せて整理中である。本文庫については、今後も法文学部及び図書館の基盤を一層具体的に解明するための手掛かりとすべく、引き続き慎重に整備を進めたい。

6. 医学図書館関係

1) 戸田文庫の整理

微生物学教科書として全国の大学で広く用いられている「戸田新細菌学」の著者「戸田忠雄（九州帝国大学医学部細菌学教室教授）」の旧蔵書及び関連書籍142冊を目録登録し、3階保存書庫の一角に「戸田文庫」コーナーを設けた。九大コレクション上でも文庫として書誌・所蔵データが見られる。

2) 櫻井恒次郎文庫の整理

「櫻井式体操」の名で全国及び海外にまでその名を馳せた九州帝国大学医学部解剖学教室教授「櫻井恒次郎」の旧蔵書及び関連書籍64冊を目録登録し、3階保存書庫の一角に「櫻井恒次郎文庫」コーナーを設けた。九大コレクション上でも文庫として書誌・所蔵データが見られる。

3) ミヒェル文庫の整理

元九州大学大学院言語文化研究院長で九州大学名誉教授ヴォルフガング・ミヒェル（Wolfgang Michel/Michel-Zaitso）が収集した医学・薬学・本草学関連の古医書44冊が伊都図書館より医学図書館移管されたのを機に、医学図書館3階展示室に「ミヒェル文庫コーナー」を設置した。九大コレクション上でも文庫として書誌・所蔵データが見られる。

4) 和漢古医書のリスト作成

貴重書庫内の和漢古医書について、書名や教室名、備品番号を記入したリスト作成に着手した。未登録資料が多いため、このリストが完成すれば検索等に役立つと思われる。リストを完成させ、公開することが今後の課題である。

7. 資料保存関係

1) 事例報告

国立国会図書館東京本館で開催された第28回保存フォーラム「図書館資料を守るIPMの実践」において、九大図書館での取り組みについて「九州大学附属図書館とIPM」と題した事例報告を行った。

また、岡山大学で開催された平成29年度国立大学図書館協会地区協会助成事業中国四国地区ワークショップ「資料のカビ・虫害の予防と対策」において、伊都図書館の事例報告を行った。

2) 研修への参加

一橋大学社会科学古典資料センターで「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」の一環として行なわれた平成29年度西洋古典資料保存実務研修に班員1名が参加し、8週間の日程でセンターの保存修復作業や講習会実務全般に携わるOJTを受講した。また、同センター主催で行なわれた平成29年度文化的・学術的資料の保存シンポジウムにおいて実施された実務研修受講者報告会で、研修受講者による討論・質疑応答に参加した。

前述のワークショップ「資料のカビ・虫害の予防と対策」では、班員1名が実習に参加し、資料を長期保存し活用していくため知識および技術を習得した。

3) 移転に伴う資料保存対策

新中央図書館への移転が迫った貴重書の保全対策として、処置が必要な資料の調査、容器等の検討を行った。各々の資料に応じたサイズ・仕様に応じた収納箱約840個を購入し、クリーニング及び収納作業を実施した。

また、前年度に引き続き、資料移転に先立つ資料のクリーニングを順次実施し、職員によるクリーニング作業にあたっては、班員が指導・助言を行った。さらに、寄贈資料や研究室返却資料を中心に、冷凍庫を用いた低温殺虫処理を継続して実施した。

移転後の新中央図書館の保存環境についても、竣工後の各収蔵スペースの空調を稼動し、温湿度のモニタリングを行うとともに、30年度の移転に備え、貴重書室の残留ガスの測定を実施した。

伊都図書館の自動書庫についても、東京文化財研究所の教員と情報交換および現地確認を行い、今後連携しながら対策を進めていくことを確認した。

4 学術情報の流通および発信に関する調査研究

室員	富浦 洋一 (附属図書館副館長, システム情報科学研究院教授)
	畑埜 晃平 (附属図書館研究開発室准教授)
	廣川佐千男 (情報基盤研究開発センター教授)
	伊東 栄典 (情報基盤研究開発センター准教授)
	池田 大輔 (システム情報科学研究院准教授)
職員	林 豊 (eリソースサービス室リポジトリ係)
担当窓口	井ノ上俊哉 (eリソースサービス室長, 図書館専門員)

<研究開発の概要>

九州大学が蓄積する学術情報資源をより効果的に発信するために、発信機能の高度化と検索システムに関する研究開発を行う。

<研究開発の内容>

1. 汎用的なデータリポジトリについての研究開発 (池田)

様々なデータを分野外の人でも簡単に使えることを目指し、データ流通基盤の概念的なフレームワークを提案する研究プロジェクト(科研基盤(B))を実施中である。検索という簡便な手法でフレームワークを個別化し、分野別のリポジトリが得られる点が独創的で、フレームワークは分野を越えた学術情報流通基盤となることが期待できる。これを達成するために、学術情報流通の基本的な仮説を設定し、これを検証する仮説検証型で研究を進める。仮説にあたる(1)フレームワーク、これを検証するプロトタイプを(2)データと(3)インターフェイスに分けて研究を進めている。

平成29年度に、(1)のモデル化の一環として、これまでのリポジトリ機能を調査し、歴史的な位置付けを行った。また、(1)(3)の両面にかかわるプロトタイプ構築について、前年度調査したクラウド上で主に位置とその関連情報を集積する既存システムを用いて、小規模ながら考古学分野でのニーズを踏まえて、実際にデータを載せるシステムを構築した。また、伝統料理についてのニーズ調査も行い、同じシステム上でデータを載せるシステムを構築中である。(2)について、機関リポジトリ等で公開されている論文から、自動的に関連するデータセットを特定し、論文からメタデータを自動的に抽出するアルゴリズムとプロトタイプを構築し、国際会議で発表した。当初は特定のデータセットを仮定したものだったが、一般のデータセットに拡張したものを実装し国際会議に投稿準備中である。

5 情報専門職の育成に関する調査研究

室員	石田 栄美 (附属図書館研究開発室准教授)
	岡崎 敦 (人文科学研究院教授)
担当窓口	瓜生 照久 (図書館企画課長)

<研究開発の概要>

図書館職員の専門性および次世代を担う情報専門職の育成をはかるための調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. シンポジウム等の開催

1) これからの学術情報システム

平成29年10月13日（金）に、大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議に設置された「これからの学術情報システム構築検討委員会」での最新の検討状況に関する報告と意見交換のためのイベントを開催した。

2) IIIF (International Image Interoperability Framework) ワークショップ in 九州

平成29年10月20日（金）に、画像データやそれに対する注釈情報等の形式を統一することによって画像へのアクセスを標準化し、相互運用性を高めるための国際的なコミュニティ活動であるIIIF ((International Image Interoperability Framework)に関するワークショップを開催した。IIIFへの理解を深めるため、IIIFの概要、APIやビューアなどIIIFが持つ機能、日本の研究資料を対象としたIIIFの導入事例に関する3つの講演のあと、IIIFの実習をおこなった。

3) 情報管理専門職をめぐる民間企業と大学・学界

平成29年11月17日（金）に、アーキビスト等情報管理専門職に関する教育研究や人材育成のあり方について具体的に議論し、今後のキャリアパスの方向性や教育・研究における連携協力の可能性を探るためのシンポジウムを開催した。

4) Computational Archival Science (CAS) 講演会

平成30年1月15日（月）および16日（火）に、行政機関や企業等が業務上作成する文書や記録を管理し提供するための実学であるArchiveと、情報科学を融合させた分野である「Computational Archival Science (CAS)」に関する講演会を開催した。講演資料は、九州大学学術情報リポジトリより公開している。

URL: <http://hdl.handle.net/2324/1905196>

URL: <http://hdl.handle.net/2324/1905197>

2. ライブラリーサイエンス専攻における教育成果公開と図書館職員との意見交換会

1) PTL (Project Team Learning) II 研究成果発表会

平成29年7月27日（木）に、ライブラリーサイエンス専攻において実施している、複数の教員と学生による実践的教育プログラムの成果発表会を実施した。29年度は、「デジタル古典籍のトリセツ」と題して、画像データ化された歴史的資料の公開に関する調査報告が行われた。

6 新たなサービスの創出に関する調査研究

室 員	石田 栄美（附属図書館研究開発室准教授）
	畑埜 晃平（附属図書館研究開発室准教授）
担当窓口	瓜生 照久（図書館企画課長）
	斎藤 未夏（利用支援課長）

<研究開発の概要>

図書館利用状況の分析や国内外図書館の視察等にもとづき、新たなサービスの創出に関する調査研究を行う。

<研究開発の内容>

1. 海外の大学図書館との連携、訪問調査（富浦，石田，畑埜，渡邊）

メリーランド大学教授 Richard Marciano 教授，テキサス大学 Texas Advanced Computing Center のデータアーキビスト Maria Esteva 博士を招聘し、これからの情報専門職に関する議論，アーカイブ資料を用いた研究について議論するとともに，Computational Archival Science に関する講演会を開催した。更に，チュラロンコーン大学中央図書館への訪問および調査をおこなった。

2. 貴重書のデジタル化及びオープンデータ化に関する検討（畑埜，石田，川平）

つばさプロジェクトの支援（代表：石田）のもと、附属図書館の資料をオープンデータとして提供するための準備として、貴重書（雅俗文庫）41点（57冊+56丁）のデジタル化作業をおこなった。デジタル化した資料は、貴重書コレクションでも公開予定である。

3. くずし字区切りデータセットの作成（畑埜，石田，川平）

つばさプロジェクトの支援（代表：石田）により、人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）で公開されている日本古典籍字形データセット、および第21回 PRMU アルゴリズムコンテスト (<https://sites.google.com/view/alcon2017prmu/>) に基づいて、くずし字の区切りデータセットを作成した。本データセットはオンライン上で公開予定である。